

改めてもう一度お尋ねします、「どう語りかけますか？」

先日、プロジェリアの少女のドキュメンタリー番組「短い命を刻む少女～アシュリーからの贈りもの～」が放送された。

この少女の番組は過去4回放送され、今回はそのダイジェストと、その後の平均余命を過ぎた14歳の今の様子とで構成された続編でもあった。

当HPで2回ほどこの子どもたちに触れたことがある（「雑学」バックナンバー 2004.12.25. 緩和ケア関係P、「どう話しかけますか？」、随想等関係（Ⅲ）P、2004.12.19.「プロジェリアの子どもからのメッセージ」：参照）。

自分の飼っていたハムスターが両後ろ足がマヒし餌・水分を自力摂取できなくなり、動物病院からは安楽死を勧められたが、ハムスター用の車いすを工夫・手作りしながら、「後ろ足を動かさないからって、どうして安楽死させなきゃいけないの？命があるんだから、生きていて当然でしょ。私もたまに痛みはあるけど、それも人生の一部だと思っている。そんな時、私は座ってリラックスする。ただそれだけのこと…」と語っている。

また、少女は今の自分の使命と感じ始めて、インターネットを通じて年下のプロジェリアの子どもたちへのビデオメッセージの中で、「私は悲しい時、楽しかったことを思い出すの、友だちのこと、家族のこと、自分がどれ程ラッキーかって。悲しんだり怒ったりしないで、人生には楽しいことが一杯あるから。嫌なことを忘れて、新しい一日を迎えよう。人の役立つことをすると、気持ちいいよ。」と語りかけている。

私は、人が生きている、生きる行く喜びは、「課題解決（知らないことを知りたい）の喜び」と「人と交わり合う（助け合ってる）喜び」の2つの側面しかないのではないかと単純に考えている。

周りから見れば過酷な運命を背負い、短い命を刻む日々のように思える少女は、奇しくも、人生の意味（目的）を、14歳にして上述のように的確に語っている。

人はこうした方々の話に、時に「運命から逃れない日々であり、自分の人生に向き合う機会が多いから…」と他人事で済ますのは、それは単なる逃げ口上であり、考えるのは面倒だからと避けているだけでないだろうか。

それは逆に云えば、日頃我々が、如何にこうした自分自身の「生」についての思索する機会から目をそらしているのではないだろうか。

それでは、具体的に思索する機会として、もう一度、私自身にも、あなた自身にも、お尋ねします。

「あなたは、このプロジェリアの子ども達に、生きる意味をどう語りかけますか？」

（2005年9月28日 記）